

アイデンティティ生成過程の再政治化戦略

——「バトラー＝ラクラウ論争」における——

吉 田 直 哉

はじめに

従来、「アイデンティティ」の概念を言説化してきた「発達教育学」とは、発達主体の個人化と、個人の抽象化による普遍化という二つの前提を方法論的に有するパラダイムであった¹⁾。しかし、ジークムント・バウマンが指摘するように、アイデンティティは、近代化の帰結である「個人化individualization」によって、もはや普遍的かつ所与的なカテゴリーではありえなくなっている²⁾。バウマンによれば、「個人化」は、アイデンティティを、「あたえられるもの」から「獲得するもの」へと変容させ、全てのアイデンティティ獲得は、「個人」に帰責されることになった。その結果が、アイデンティティの流動化である。高度の資本主義社会においては、個人的生は「選択」によって特徴付けられるが、この「選択」を可能にしているのが、アイデンティティの流動性＝偶発性なのである。またウルリッヒ・ベックは、このアイデンティティ選択の偶発性とグローバルイゼーションを、《自己との対決》をその内的論理としてもつ「再帰的近代化」の二つの帰結であるとした上で、それによる不確実性の拡大によって、帰責の困難性が増したために、既存の政治的意思決定の領域において、新たな政治的対抗軸の創出がみられているとする³⁾。このような、バウマン、ベックらの「モダニティ」論を引き受けるならば、近代成熟社会におけるシステムの不確実性は、個人化におけるアイデンティティ生成過程にも浸潤するため、モダニティ内部における個人を焦点化する場合には、そのアイデンティティを脱普遍化し、それを不確実性・不安定性の位相のもとに把握しなおす作業が要求されるということになる。

本稿の検討の対象はジュディス・バトラーとエルネスト・ラクラウとの間に交された「論争」であり⁴⁾、目的は、当該論争におけるアイデンティティを問題化＝脱普遍化＝脱自然化する論理の再構成を試図す

るにある。本論争を対象化する所以は、本論争が、モダニティ論の重要な帰結である社会の体制外的裏付けの不可能性、および社会への果てしない自己合理化の要請という二つの成果に適合的な政治的行為体の形態に関する重要な示唆を含有すると思われるからである。

本稿では、まず、第1章において、『ジェンダー・トラブル』を中心的に検討し、バトラーの政治的行為体、および政治的实践に関する行論を瞥見する⁵⁾。つづいて、第2章では、『ポスト・マルクス主義と政治』を中心に検討し、ラクラウの政治的实践に関する立論を抽出する⁶⁾。そして、第3章では、前2章を踏まえつつ、「バトラー＝ラクラウ」論争を、政治的行為体の形成機序に関する論争として再構成することが目指される。

第1章 バトラーの脱アイデンティティ化戦略

バトラーは、まず、既存のフェミニズム理論に見出されるふたつの本質主義を批判する。まず、主体としてのアイデンティティを、画一的・統一的なものとして位置づけるという認識論的な本質主義を、「普遍主義」と呼ぼう。そして、抵抗の基盤を、既存の法＝言説秩序の〈外部〉の純粋性に求めるという存在論的な本質主義を、「基盤主義」と呼ぼう。そして、バトラーにあっては、この「普遍主義」、「基盤主義」という二つの本質主義が批判される。まず、前者が批判されるのは、主体としてのアイデンティティの普遍性や統一性を前提することは、言説の表象的機能によって産出されたものであるに過ぎないことに無自覚な想定であるのみならず、社会的構築の多様な固有性を「脱文脈化」することによって抑圧してしまうためだ（GT [13=40]）。一方、「基盤主義」が批判されるのは、物質性を前-言説的なものとして生産するのは、ジェンダーという文化構築的

な装置＝言説それ自体による結果であるという事実を見落としているためだ。ここで転倒されているのは、前-言説的なものとしてのセックスが文化的な意味づけを受動的に蒙ることによってジェンダーが導出されるとする因果律である。

バトラーにおけるアイデンティティとは、主体の内的な首尾一貫性、現象的には「ひとの自己同一的な位置」である。そして、この存在論的な本質主義に裏付けられたカテゴリーとしてのアイデンティティは、社会的に設定され、維持されている「理解可能性のマトリクス」でもある。さらに、バトラーにおいて、アイデンティティとは「主体」である。既存のフェミニズムは、この「主体」を、それが内的な首尾一貫性をもつという普遍主義によって基礎付けてきた。このような普遍主義に固執する限り、具体的な「女たち」が個別に構築される際の、文化的・社会的・政治的な交錯の多様性を結果的に無視することになる。ゆえに、バトラーにとって、アイデンティティは乗り越えの対象なのである。バトラーは、既存のアイデンティティに代替するアイデンティティを、このような言説-外的な物質性に依拠することで設定しようとするプロジェクトを峻拒している。バトラーにおけるこの「反物質主義」は、身体の物質的現存を否定するものではなく、身体をジェンダー化するその実践のシエマが、当該の実践の意味づけをも担うという再帰性を指摘するものである。ジェンダーは、言説による構築を経ることによって、初めて認識可能となる。換言すれば、実践の累積の結果としての「言説discourse」は、自らの枠組みに適合的な実践のみを意味づけ可能にするという意味で、認識論的なシエマとして機能しているということである。

バトラーによれば、「言説」の産出する秩序は、慣習的・反復的な実践によって顕現する。秩序はある一定の様式による行為のみを認可し、その実践形態を制限する条件として機能する。バトラーが拒否しているのは、社会的規範に裏付けられた行為以前に「主体」が存在するという想定であった。バトラーは、固定化された画一的なアイデンティティに替わって、アイデンティティの不断の変容過程そのものを表徴するため、アイデンティフィケーションidentificationという概念を導入する。バトラーによれば、ジェンダーは、パフォーマティブな実践の結果として、つねに表出され続けるほかないものである。換

言すれば、そのパフォーマティヴィティの背後に、何らのアイデンティティも存在しないということである（GT [136=240]）。バトラーが、「パフォーマンス」という語を回避し、パフォーマティブな実践を「パフォーマティヴィティperformativity」と呼ぶのは、その実践の背後に、前-言説的な「主体」を想定しないことを強調するためである（GT [8=32]）。

このような脱「主体」、脱アイデンティティというバトラーの行為体に関する認識は、それが構成するであろう政治戦略にも重要な帰結を齎す。それは、政治体もまた、脱アイデンティティ化を蒙るということである。バトラーによれば、政治的諸集団を糾合する際、アイデンティティの概念によってその連帯が組織化されうると前提すべきではない。バトラー的「連帯」は、画一的・統一的な「アイデンティティ」を予め指定しないため、その形態を予知したり、あるいは形態の最終目標を据えて、それへの収束化を図ったりすることは不可能なのである。単一のアイデンティティを拒否することで、アイデンティティは可変性へと導かれる。バトラーが想定する「開かれた連帯」というものは、目のまえの目標にしたがって絶えずその形態を変容させていく、生成的で過程的なものである。それはアイデンティティを前提として定義してしまうことによって、あらかじめ新たな結合可能性を閉じてしまうような基準的な最終目標にしたがうことなく、多様な収束や分散を容認する開かれた集合である。このような集合は、論理的に背反するかに見える相争う複数の普遍概念を翻訳実践によって媒介することによって可能となる。このような「文化翻訳cultural translation」は、支配的言語に位相転換を施すことで、それを「異様なもの」として再提示し、脱自然化する営為であると同時に、競合する複数の諸集団を媒介的に架橋し、新たな連帯の形態を生成する場を切り開く実践ともなりうるのである。

第2章 ラクラウのアイデンティティ再編成戦略

アイデンティティの不安定性の認識が、政治的行為体のモデル化に重要な連関をもつというテーゼは、バトラーのみならず、本章で取り上げるラクラウの所論にも共有されている。まず、ラクラウは、「社会the Social」、「政治空間」、政治主体としての

「階級」を統一的・画一的な所与のカテゴリーとして定位することを拒絶するという反普遍主義の立場を明確にする (HSS [111=178])。そして、政治的行為体が、必然的にある特定の政治的アイデンティティに連繫されるという信条を拒否し、反基盤主義を採ることを闡明する。

まず、ラクラウの政治空間認識を見よう。彼によれば、異なった社会諸領域の再生産が、つねに変動する諸条件によって規定されるようになった近代になって初めて、権力の不均衡によって構成されるヘゲモニー関係が、支配的な政治形態として現出した (HSS [138f.=219f.])。社会変革を遂行する単一的で特権的な主体位置の解体の結果、「ヘゲモニー hegemony」が出現するのである。所与としての集合的アイデンティティの自明性が解体した以上、あらゆる政治的カテゴリーとしての諸アイデンティティは、入念な構築の結果としてのみ産出されるものとなり、これこそが第一の政治的問題となる (HSS [133f.=212f.])。そして、このような多元化されたアイデンティティの乱立を可能化する場合こそが、ヘゲモニー的領野なのである。

そして、このヘゲモニー化した社会空間、すなわち社会的なものの偶発性が、「節合 articulation」という政治的連繫への可能性を切り開く。政治的実践は、分離された諸要素、つまり個別の政治的主体を再構成する「節合」を拡大させることから開始されるのである。「私たちが節合と呼ぶのは、節合的实践の結果としてそのアイデンティティが変更されるような諸要素のあいだに、関係を打ち立てるような一切の実践である。節合的实践から生じる、構造化された全体性を、私たちは言説と呼びたい」 (HSS [105=169])。

上掲の引用部に見られる如く、節合的实践から生じる、「構造的な全体性」を、ラクラウは「言説」と呼ぶ。しかし、パラドキシカルなことに、偶発性と節合が可能になるのは、節合によって可能となった言説的編成＝全体性が不可能であるため、すなわち、差異の言説的編成への節合が最終的に未決であるためである。節合は、節合の不完全性によってのみ可能となるのである (HSS [113-114=181-183])。

次に、ラクラウの政治的行為体についての認識を見よう。彼は、新たな政治性の行為体たるその「主体」とは、「言説構造の内部における位置」によって規定されるとし、言説の外部にその起源を求める基

盤主義を批判する (HSS [184-186=114-116])。主体は、言説構造に先行するものではないから、「主体」を社会関係の起源として定位することは不可能である。その言説的位置としての主体は、つねに他の諸主体との示差的な関係性の中で、言説的全体性に内在的な必然性のもつ偶発的決定を蒙る。別言すれば、主体位置は、他の諸主体の位置から完全に分離させたうえで、統合的に定義されることは出来ない。この主体の不安定性が、アイデンティティ生成の不確定性を生み出す。主体のこの重層的被決定性による偶発性は、その言説的アイデンティティの不完全性・多義性を帰結する。前述のように、アイデンティティは関係的・否定的に析出されるが、その構造は、ラクラウにおいては静態的なものとしては捉えられておらず、つねに流動化しつつある地勢なのである。構造の動態的な把握によって、ラクラウにおけるアイデンティティは、不断の再規定の過程の中におかれる不安定なものとして想定されることになる。そして、主体位置の実定性と統一性の拒否が受け入れられるときのみ、複数主義 pluralism が認められるのであり、ラクラウの戦略は、この差異によって析出される関係化された複数のアイデンティティを節合することによって、一時的な連帯を創出することである (HSS [116f.=263f.])。節合による連帯の形態は、予め決定されうるものではない。アイデンティティの獲得不可能性こそが、節合的实践を可能化する地平を構成するのである (HSS [170f.=269f.])。

上述のような、不安定な個別的アイデンティティを、新たな節合的实践によって連繫・再編成し、一時的でありつつも、抵抗的な政治体を構成させるという戦略において要諦を占めるのが、「等価性の連鎖 chain of equivalences」の編成機序である (HSS [128-133=203-210])。既存の示差性の解体によって生じた諸要素の流動化・多数化は、新たなアイデンティティの構築、新たな節合的連携の可能性を切り開く。そのような、諸要素を規定する差異システムとしての「社会」の不安定性・不可能性によって、その意味作用は偶発化されるが、差異による示差性の自同性を脅かす力動性を、ラクラウは「敵対性 antagonism」と呼ぶ (HSS [124-127=199-202])。いわば、「敵対性」とは、「社会」が最終的に縫合不可能であることを示し、社会という一定の秩序が存在しないことの表徴なのである。それゆえ、「敵対性」

は、言語システムにおける差異の失敗によって析出される。

このように、社会空間の統一性を否定し、社会的なるものの最終的な閉域化という存在論的な仮説を放擲するなら、社会的空間を、その増殖する複数性の位相のもとに捉え返すことが要請される。「等価性の論理」は、この複数性の場において、ある個性を、他の無数の個性と置換可能なものにさせる。等価性の連鎖を伸張させ、しかし常に同時にその連鎖を切断し、また別様の連鎖の可能性を劈開すること、つまり、等価性を連鎖させることによって既存のアイデンティティを流動化し、それによって新規のアイデンティティへの節合を可能化するための構築の試みこそが、ラクラウのいう「政治politics」なのである。

第3章 「バトラー＝ラクラウ論争」の構図

本論争では、「主体」概念の認識、「主体」の政治化における「普遍性universality」の作用、および「主体」の位置付けにおける「アイデンティティ」の定位、の3点が、主たる議論の主題となっている。

まず、バトラーにおける「主体」の不完全性とは、(1) 主体は、それが代表＝表象している人々を十全に記述することの不可能性、(2) あらゆる主体は差異によって構成されており、主体の「構成的外部」として生産されているものを、主体に内属させることの不可能性、の2点からなる。

一方、ラクラウも、バトラーの主体の不完全性のテーゼに部分的に賛同する。彼によれば、マルクス主義における「階級」概念のように、主体をアイデンティティとして集団的に組織化して回収することは困難となっている。換言すれば、主体を、所与の集合的アイデンティティとして想定することは不可能となっているということである。ラクラウは、多様化・偶発化の進行する近代においては、「社会」が「個性particularity」から成立していることを前提するがゆえに、政治的行為体は、この個性を、「普遍性universality」のカテゴリーによって連繋させ、等価的に接続していくことによって産出される構築的なものとして想定される。普遍性とは、個別的な存在の行う実践行為を、政治的な行為として意味づける語彙である。しかし、ラクラウのいう普遍性とは、決してアприオリな統一の実体ではない。その

普遍性とは、個性に「汚染された」普遍性である。普遍性は、なんらかの個性に実体化されるときにのみ存在するが、逆に、個性は、普遍化効果の場にならない限り、決して政治的にはなりえない。そして、この、普遍／個別の不可避的な裂開を架橋するのが、ラクラウにおける政治的主体なのである。

ラクラウによれば、普遍性は、「等価性の連鎖」を通してのみ作り上げられうるものであり、これを構築する自らの「等価性の論理logic of equivalence」と、バトラーの「文化翻訳」の概念の近似性を指摘する(CHU [194=260])。普遍と個別の偶発的一致は、終始、不可能性の表象に浸潤されているために、普遍の名称における個別の痕跡は消去しえない。ヘゲモニーが、このような普遍と個別のパラドックスを前提としている以上、政治空間において、決定的な作用を及ぼすのが「代表＝表象representation」である。しかし、表象される対象である普遍性の語彙とは、個性を前提せざるをえないという点において構築的な虚構である以上、その表象関係は、必然的に表象不可能性に邂逅する。つまり、全ての代表＝表象は、「不在であるなにもか」の現前であるという点で、虚構なのである。しかし、ラクラウによれば、この虚構、すなわち表象不可能性を背負った普遍的表象こそ、ヘゲモニー関係の条件に他ならない。

一方、バトラーは、「普遍性」を、形式主義的なアприオリとして定位することを拒否する。そして「普遍性」を、「文化翻訳」という構築的な行為の結果として捉えるため、その形式も内容も、つねに抗争の対象となりうる。支配的な言語様式で語られる普遍が、従属的な言語様式に模倣的に翻訳された際、そこには不可避的に剪断が生じる。普遍がその保護の圏域から排除する人々が、自らを排除する普遍それ自身の言葉で語り、普遍の虚構を暴露すること、これこそが政治的課題となるのである。言説は慣習的にのみ機能しうる反復的なものであるから、その過程において、逸脱的な効果を産出するという再生産の失敗のリスクをつねに背負う。ゆえに、普遍性の齎す慣習的で排除的な規範は、倒錯的に反復されることによって、以前の普遍性のもつ限定的で排除的な性格が明らかにされると同時に、それとは別様の、非慣習的な普遍をあらたに公式化することが可能となるのである。

このような見地に立つバトラーは、「主体構築に関するラカン派の見解が、ヘゲモニーの概念と両立で

きるか」と疑問を發し、ラカン派の述べる主体形成の不完全さの表徴である「切断線bar」をラクハウが援用することで、彼が超歴史的な措定を暗黙の内に密輸入し、基盤主義的な誤謬に陥ってしまう危険性が生じると批判する(CHU[5=13])。バトラーにおける主体の不完全性は、主体構築の端緒における「予めの排除foreclosure」によって刻印される普遍的な構造的欠如によるものではない。それは、アルチュセールにおける「呼びかけ」という日常的な過程の不完全性によって現出するものなのである⁷⁾。バトラーは、この主体形成における欠如の契機が、社会的なものに内属するという点において、ラクハウと一致しているとする。しかし、バトラーが危惧するのは、ラクハウが、主体性の欠如を、「去勢」という基盤主義的な残響をもつメタファーによって記述する結果、その欠如が超越論的地平へと追いやられてしまう可能性である。もしラクハウが、そのように性的差異の「起源」を、社会的な表象不可能性の領域に昇華させてしまうならば、この「起源」を分節化することも、それを奪取して倒錯的に反復させることで壊乱することも、不可能となる。「主体」を形成する規範による呼びかけは「言説」という形態を採るが、その言説的な呼びかけは、言説を産出した権力の意図しなかった目的と結果を出来させる可能性をつねに胚胎している。それゆえ、バトラーにおける「主体」の「アイデンティティ」とは、つねに／すでに失敗しているものである。

一方、ラクハウにおける「主体」の位置とは、他の「主体」の位置との差異によって、排除的に規定されているものである。そして、ある「主体」の「アイデンティティ」もまた、他の「主体」の「アイデンティティ」との差異関係によって規定される。しかし、「主体」の位置を、統一的な「アイデンティティ」に収斂させることは、不可能なのである。それは、差異空間としての「社会」が、統一的に縫合されることがあり得ないため、差異の相互的な価値関係も、つねに流動化しつつあるためである。つまり、ラクハウにおいては、ある「主体」が、ある「アイデンティティ」によって表象されていることは、つねに偶発的であり、それゆえに、「主体」が「アイデンティティ」によって完全に表象されるということはある得ない。ラクハウは、この「主体」を、さまざまな「普遍性」の語彙に偶発的に節合することで、新たな「アイデンティティ」の生成が可能になるとし、この

ような不安定化された政治的糾合を「等価性の連鎖」と名づける。

ラクハウが「等価性の連鎖」の結果として表現した、「空虚だが、消去不可能な場」としての普遍性は、つまりその空虚性としてののみ、個別と普遍を往還するものとなる。しかし、バトラーから見ると、普遍を、その空虚性において特徴付けるとするならば、そして、この空虚性を代補することが政治的行為の意味づけを構成するとするならば、そこにおける政治は、言語の〈外部〉に置かれることになる。バトラーが危惧するのは、このように、政治の起源を前-言語的に措定するならば、その外部的な起源は本質的な存在論的カテゴリーとなってしまう、それへの壊乱的反抗実践が不可能化されることなのである。

バトラーにとっての「普遍性」は、つねに／すでにローカルなものでありながら、それを権力が言説＝規範化することによって、恣意的にそのローカルリティが隠蔽されているようなものである。そして、バトラー的な政治的实践とは、普遍的であるという虚構を主唱するローカルな普遍性を、その範疇から排除された行為体が、その普遍性の言語を個別的な言語へと翻訳することによって騙取し、それを倒錯的に反復させることで、普遍性の虚構を暴くことであった。バトラーの「普遍性」は、規範の慣習的な実践として、個別の水準で作用する。このような規範の実践によって、「主体」が生成される。そして、規範の作用は、それが普遍性として表象されることによって担保されるために、規範の実践によって産出される「主体」もまた、普遍性の語彙によって表象されることで、その個別的・ローカル性が脱文脈化され、「主体」形成以前の多様性は隠蔽・排除されることになる。バトラーの対抗政治は、この権力の媒体としての自己同一的な「主体」を産出する普遍性の虚構を、そこから排除されていた別の個別性に再文脈化された攪乱的な実践によって脱自然化する試みとして構想される。バトラー的対抗実践は、「主体」の不安定化によって、その「アイデンティティ」を攪乱し、それらを構築している「普遍性」の虚構を暴露するのである。

対して、ラクハウの「主体」は、それは流動的な構造的差異関係によって規定される限りにおいて、不安定なものであった。政治空間における諸要素は、根本的に個別性の水準にある行為体であるから、これらの行為体を等価性によって連繋するためには、

普遍性の語彙が要請される。ラクハウの「普遍性」は、政治的行為の結果として構築される、政治的結合関係の表象なのである。しかし、この個別的な行為体と、それが節合しうる普遍性の間には、何らの本質的な必然性はなく、この連関は終始偶発的なものであるとされる。ラクハウ的な政治的实践とは、個別化された諸行為体を、節合的に連関させ、新たな普遍性のもとに「主体」として構築することである。諸行為体は、複数の「アイデンティティ」を身に帯びているが、これらの「アイデンティティ」も差異によって決定される不安定なものであるため、「アイデンティティ」の諸要素は、多様な形態における「主体」化を可能化するのである。

おわりに

本稿では、「普遍性」の位置付けの相違によって、バトラー、ラクハウ両者の政治実践にととの「アイデンティティ」の戦略的意義をめぐる対立が生み出されたことが明らかにされた。本稿で剔出されたような政治的行為体に対する認識の相違の背景には、それを産出する「言説discourse」と「実践practice」の位置付けの懸隔が存すると思われる。しかし、この点に関する検討は、本論争では十分に展開されてはいない。というのも、本論争内では、この点に関して、バトラーがアルチュセールを、ラクハウがラカンを前提として論じているが、バトラーのラクハウ批判はラカンへの、ラクハウのバトラー批判はアルチュセールへの批判へ回収されてしまい、両者がそれぞれアルチュセール、ラカンの理論を援用するに至るまでの理論的構成の理路そのものは、建設的な形で再検証されなかったためである。この点が本論争の射程の限界であり、爾後のわれわれに課された検討課題である。というのも、「言説」と「実践」の相互規定性は、アルチュセール、ブルデュー以降の再生産論の重要な成果である「プラチックpratique」論における最重要概念であるために、バトラー、ラクハウから「プラチック」論を超克する地平を切り拓く可能性を汲み尽くすことを試みる際、両者におけるこの両概念の位置付けを明らかにすることは、今後の探求への方法論的前提となると思われるからである⁸⁾。

- 1) 「発達教育学」なる術語を掲げるにあたって、ここで念頭に置かれているのは、今井康雄「見失われた公共性を求めて—戦後教育学における議論」『メディアの教育学』東京大学出版会、2004年、および小玉重夫「戦後教育における教師の権力性批判の系譜」森田尚人・森田伸子・今井康雄編『教育と政治』勁草書房、2003年である。
- 2) バウマン『リキッド・モダニティ』森田典正訳、大月書店、2002年。特にその第2章を参照。
- 3) ベック「政治の再創造—再帰的近代化理論に向けて」ベック；ギデンズ；ラッシュ『再帰的近代化』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳、而立書房、1997年。
- 4) なお、本稿において「バトラー＝ラクハウ論争」とは、バトラーとラクハウの往復書簡「平等の使用」(Butler; Laclau; Laddaga, “The uses of equality”, *dialectic*, Vol.27, No.2, 1997)、およびスラヴォイ・ジジェクを交えた交換論文集 (Butler; Laclau; Žižek *Contingency, Hegemony, Universality*, Verso, 2000. (竹村和子・村山敏勝訳『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』青土社、2002年)。以下、CHUと略記し、該当頁を掲げる場合は[原著＝邦訳]の順で表示する) における、バトラーとラクハウの応酬を指す。前者は、「差異の政治」が声高に主唱される現在において、あえてそうした風潮を相対化するため、「平等」という概念の射程を見極めることを企てたもので、後者における論争の直接的端緒となったものである。本稿では、後者の論文集を主たる検討の対象とするが、そこにおける「普遍性」への注目、前者における、「平等」という「普遍性」の語彙に関する議論が、その前哨となっていたことは、銘記されるべきである。
- 5) Butler, *Gender Trouble*, Routledge, 1990. (竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社、1999年)。以下GTと略記し、該当頁を掲げる場合は[原著＝邦訳]の順で表示する。なお、バトラーへの教育思想的アプローチの試みとして、奥野佐矢子「言語のパフォーマティヴィティによる主体構築に関する考察—ジュディス・バトラーの思想を手がかりとして—」『教育哲学研究』93号、2006年がある。
- 6) Laclau; Mouffe, *Hegemony and Socialist strategy Secound Edition*, Verso, 2001. (山崎カヲル・石澤武訳『復刻新版 ポスト・マルクス主義と政治』大月書店、2000年)。以下、HSSと略記し、該当頁を掲げる場合は[原著＝邦訳]の順で表示する。なお、本書は周知の通

り、シャンタル・ムフとの共著であるが、本稿で検討の対象とした「論争」の二つのテキストにおけるラクラウの所論と、本書とは内容的な連続性が明白であるため、本論争の再構成に関連する限りにおいて、本稿では本書の内容を検討する。但し、本書の執筆以降、両者の間で、特にヘゲモニー領野における諸要素の矛盾を、差異の不安定性としての「敵対性antagonism」として引き受けるか(ラクラウ)、差異の暫定的な現出としての「闘技性agon」として引き受けるか(ムフ)をめぐる、分岐が生じた可能性がある。この点についての検討は、

別稿を期したい。

- 7) バトラーによるアルチュセールの「呼びかけ」批判の詳細は、バトラー『触発する言葉』竹村和子訳、岩波書店、2004年、39-60ページを参照。
- 8) 「プラチック論」の問題構制に関しては、とりあえず山本哲士「アルチュセールのプラチック論」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社、1993年、および、秋永雄一「〈教育的な関係〉の特質について」『東京大学教育学部紀要』(23)、1983年などを参照。